

# 火星



平成17年10月号

# 七曜抄（二）

山尾玉藻

七夕の夜を尋ねきし登山靴

多羅葉の辺り声する夜の秋

男衆の秋の団扇に見送らる

紫野もどりの扇置きにけり

白毫寺より雨のくる菜虫取

大和晴れ渡る蝗の頭かな

月待ちの寺のソファアの匂ひけり

水の辺の大き靴跡鳥渡る

神の鶏木の実しぐれを駈けにけり

芋嵐より出で来たる雨合羽

太白星

柳生千枝子

新しき野良着匂ふや茄子の花  
いつの間の老いや螢の明滅す  
関西に果つ生涯か星涼し  
挨花に遇ふ青春の日の如く  
日盛りの鎖引きゆく迷ひ犬  
夏休み絵日記ノート百ページ  
夏雲に遅速のありぬ浜に臥て

杉浦典子

佃島は祭支度の釘の音  
青竹を葺き了りたり祭酒

夏の雨止み佃煮の貝のひも  
芭蕉の花ゆふべの雨をつけてをり  
千代田区に曳き売のくるたうもろこし  
鏡台の椅子借りてくる心太  
わたし似の赤子の耳や祭くる

浜口高子

葎倉に葎の溢るる土用かな  
山姥をゆつくり離る大はんざき  
隧道へひとり消えたり滝がかり  
葎切やだんじり倉の開いてあり  
どしやぶりの扉を押しぬ金魚玉  
雷雲や辣蕪の皮増やしをり  
碧潭や鬼の名持ちて蜻蛉生る

# 火星作品 山尾玉藻選

ゴム長が田を見て歩く合歡の花 豊中 廣畑 忠明  
鉢植ゑの雫してゐる夏の月  
鶺鴒籥に夜の山影の大きかり  
勝手知るガス検針の夏帽子  
昔から駅へ一里の栗の花  
ズツキーニの太れる雨の葬かな 兵庫 高尾 豊子  
静けさとと思ふ物音夏の月  
逝きし日の風の唐黍畑かな  
三伏の吾が糠床の静かなり  
草いきれごと鋤き込んでしまひけり  
何の葉で指切りたる朝曇 八幡 大山 文子  
藻の花の日暮れて別の世を流る  
潮騒の遠くにありぬ蛭蓆

手話辞典広げしままや水中り  
大寺の三百畳の白雨かな  
をととひの護摩火のほふ螢かな  
蜘蛛の囿の向うへちよつと用のあり  
ヘルメットぬいで掬ひし清水かな  
屋根の上の蓬のそよぐ暑さかな  
百日紅もつとも唐人岩しづか  
舟虫の散りたるあとや日の当り  
ていねいに化粧落すや螢の夜  
螢や夫に布団の余りをり  
子の家近きサングラスはづしけり  
ケーキ屋に老人のゐる初秋かな  
大櫃の香に風鈴の鳴りにけり  
日雷いんこの羽の散りてあり  
目の前の富士に扇子を使ひをり  
川音のしづかに毛虫だらけの木  
袖口の濡れてゐるなり蝮捕

明石戸栗末廣

大和郡山城孝子

八幡丸山照子

# 選のあとに

山尾 玉藻

昨年もこの時期、同じような事を言った気がするが、今月は作品のレベルが殊に低かった。今年の猛暑は私にも厳しかった。ただただ暑いという事の方にしか脳が働かず、作句意欲が湧かなかつた事も理解は出来る。こう言う時は自分に合った良い句集を読む事をお勧めする。

九日抄の十五句位はスムーズに選びたいものだが、それもそうはいかなかつた。そのお蔭と言えば変だが、初めて九日抄に載った方も数人おられる。この方々にはこれを糧に励んで頂きたい。

鉢植糸の雫してゐる夏の月 廣畑 忠明  
静けさと思ふ物音夏の月 高尾 豊子

共にしんとした「夏の月」の句であるが、趣はやや違つ。忠明さんの「鉢植糸の雫」は、日の暮前の夕立のものとして間違いないであろう。空には赤い「夏の月」が上がっている。鉢植糸のものと見えども、作者はその雫にほっとする涼味を感じたのである。恒星園作品 噴水の向う笑顔の立つてをりも、この作者らしい品の良い佳句である。

豊子さんの「静けさと思ふ物音」は、簡潔で非常に巧い表現と感心した。「夏の月」を例えば「秋の月」とすると一句が常識となり、「冬の月」とすると即き過ぎとなる。やはり「夏の月」なのである。同時発表作「ズッキーニの太れる雨の葬かな」は、珍しい季語を上手におさめている。

屋根の上の蓮のそよぐ暑さかな 丸山 照子

類句がありそうな気もするが、「暑さかな」を良しとした。「そよぎ」に暑さを感じるのには質の良い感覚である。

蘇鉄咲き真つ平らなる熊野灘 吉田 島江

「熊野灘」は補陀落の海とも言う。そう言えば「蘇鉄」も寺に多く植えられている木である。荒々しげな「蘇鉄」に対し「真つ平なる熊野灘」が雄大でしんとした景を醸している。

引く波に砂の音あり梅雨ぐもり 土屋 酔月

作者は梅雨空の下の波打際に佇んでいる。その精神が次第に目の前の波にだけ集中してきているのである。「砂の音あり」は、研ぎ澄まされた精神から生れた賜物である。

(以下略)

同人 I

高尾豊子

# 恒星巻

父の忌の小さく枇杷の熟れにけり  
金魚玉話したきことありさうな  
香水の午後一時までもつほどに  
田に水のやうやく入りし野萱草  
小糠雨きのふの茅の輪そのままに

城孝子

田中英子

川音の逸る冷酒をこぼしけり  
金魚玉好きも嫌ひもなかりけり  
鬼灯に母のぬくみのありにけり  
健やかな夫の耳朶星月夜  
秋暑し川の端に浮くまきは瓜

たつぷりと筆下ろしある夏灯  
祝ぎごとの島にをりたる白日傘  
ゆふぐれの花ついてあるトマトの実  
急ぎをり百足虫の足のいつせいに  
夏負けてある切り口のまつ平

大東由美子

田中みゆる

落ち鮎の顔の険しくなりゆけり  
山蛭のゐるてふ橋を渡りけり  
サングラス斜にかまへて写りをり  
麻服の促音便の正しかり  
締切日過ぎてしまひし日雷

西高ットハーバー  
ヨットハーバー土用四郎の風の中  
Tシャツにヨットの絵模様鮮らけく  
冷房の効きしロビーのマーメイド号  
週明けのヨットハーバー夏旺ん  
胡麻塩のオールバックやパナマ帽

# 獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

夏の月もろみみの匂ふ島の端  
蓮池に音の湧きたつ白雨かな  
ハンカチの樹や蟬声のしきりなる  
夏負けて真珠二連のネックレス

加藤君子

花藻咲く辺に風庸の吾のあり  
地下売場つれづれに行きプチトマト  
うたた寝のあと一句あり梅雨茸  
夕立のすぎたる桶に糠足しぬ

中上照代

朝蟬を祈りの声と聞きあたり  
百日紅いまだ意識の戻らぬか  
迎への時告ぐ看護師の声涼し  
表より大蟻一匹入り来る

小林成子

七夕の駅に降りきし盲導犬  
羽づくろひの水とばしけり小暑かな  
朝顔のつるにかんがへおよびけり  
店先に先づ出されたる捕虫網

山田美恵子

忘れある浮人形と湯につかる  
湯屋までの径の草の香星祭  
パソコンを探れば夫が天の川  
朝曇る放蝶園に水の音

西畑敦子

海の日の日厨に葱を刻みをり  
人数の半端なりけり夏座布団  
幸村の抜け穴跡や蟬生まる  
発光するイヤリングして浴衣の娘

高松由利子

はんざきの岩登るてふ風の色  
サイレンに目覚めをりけり未草  
真南へ一条下ルサングラス  
打ち水の余花朗亭の八代目